

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

アフリカへの道：
動物観光からエコミュージアムまで

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 朝倉書店 公開日: 2011-03-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 池谷, 和信 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00008544

A

総括：アフリカの今を知る

A.1 アフリカへの道—動物観光からエコミュージアムまで—

a. 日本からアフリカへの道

現在でも、日本人にとってアフリカは遠い存在である。地理的距離からすると、地球の裏側に当たる南米のほうが遠いのであるが、南米には数多くの日系人が暮らしていることもあって、アフリカよりも身近に感じるものである。また、アフリカを実体験している日本人もまだまだ多くない。在留邦人の最も多い所としてケニアのナイロビや南アフリカのヨハネスブルグが知られているが、それでもそれぞれ千人近くが暮らす程度である。しかも、ピラミッドで知られるエジプトとその南に広がるアフリカとは、わたしたちの地域イメージは大きく異なっている。後者に関する情報と

いえば、野生動物の宝庫ということを除けば、内戦、貧困、干ばつ、砂漠化など、悪いイメージのニュースしか伝わってこない現状がある。

しかし、近年、日本から南に広がるアフリカへの道が大きく変わってきた。日本からの直行便こそないが、中国（香港からヨハネスブルグへは1日2便の航空便）、タイ、マレーシア、シンガポール、アラブ首長国連邦などを経由して、容易にアフリカに行くことができるようになった（図A.1参照）。しかも、アフリカの入り口であるナイロビやヨハネスブルグへ行くには複数のルートがあり、わたしたちはそれを選択することさえできる。

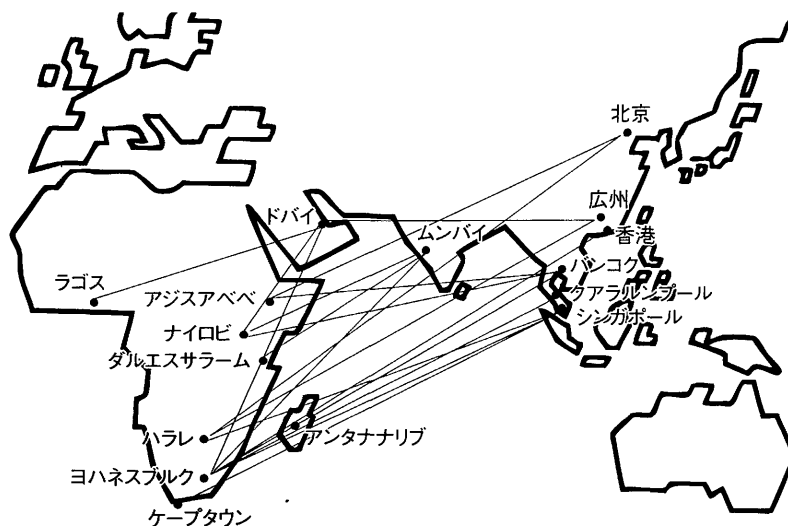


図 A.1 アジアとアフリカを結ぶ航空路線図（筆者作成）

こうしたアジアとアフリカとの結びつきが増大した背景としては、近年、両者のあいだをめぐる人々の交流が盛んになってきたことがあげられる。アフリカ人から見れば、中国やタイでの安価な衣料品を現地で購入することは魅力的であり、わたしもこのようなアフリカ商人に機内で出会うことがよくあった。現在、香港やバンコクの一角にはアフリカ商人が集まる場所ができあがっているという(三島, 2002)。また、南アフリカ在住のヨーロッパ系の住民によるアジアへの観光旅行も増えてきている。

その一方で、アジアからアフリカへの人の流れでは、中国本土からのアフリカへの移動が目立っている(池谷, 2005)。単身でいくもの、家族でいくもの、さまざまな形で仕事を求める中国人の大移動は始まっているのだ。そして、日本人のみならず、台湾や香港からの中国人もまた観光のためにアフリカに向かいはじめている。

b. アフリカの博物館とサファリ観光の実際

それでは、アフリカ観光の目玉とは、いったい何であろうか？ それは、間違いなく野生動物の観光(サファリ観光)である。わたしたちが動物

園でしか知らないキリンやライオンやカバなどを野生状態で見るができるのは、まさにアフリカならではの体験である。日本からのアフリカツアーに、これを含めていないものはほとんどないであろう(図A.2)。このため、アフリカの各国の首都には国立の博物館があることが多いのであるが、日本からの観光客に興味をもたれることはあまりない。これらは、英国やフランスやポルトガルによる植民地時代に建設されたものであるために、来館者に対して魅力的な展示を必ずしもしているわけではないということも原因であろう。しかし、たとえばナイロビのケニア国立博物館では、ケニアの歴史、マサイやキクユほかの民族文化の多様性などを短時間で知ることができる。また近年では、JICA(国際協力機構)による援助のもとで日本語のガイドブックがつけられ、日本人へのサービスもよくなっている。

それでは、サファリ観光の実際はどうだろうか？ ケニアは、動物観光においてわが国でもっともよく知られたアフリカの国である(図A.3)。国内には、数多くの自然保護区が存在しており、近接する原野にマサイの村が散在するマサイマラ国立保護区、キリマンジャロ山のほぼ全貌を見ることができるアンボセリ国立公園などが、日本を含めた欧米からの観光客に人気の高い場所である。このほかにも、ナイロビ市内にも自然保護区があり、キリンやカバを容易に見ることができる。

さて、動物観光を目的にした人びとは、自然保護区内に位置するロッジに宿泊をして、そこを



図 A.2 アフリカ観光用のパンフレットの例

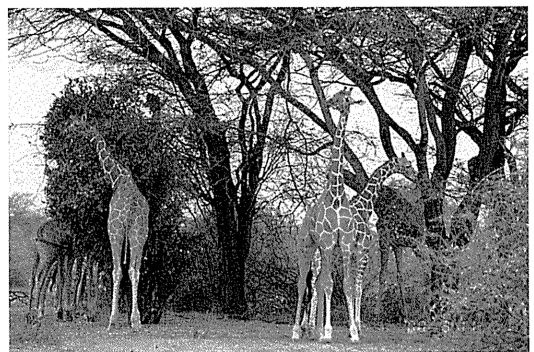


図 A.3 サファリ観光で見れる光景(筆者撮影)

ースに四輪駆動車を使ってサファリに出かけることが多い。その際に、観光ガイドがいち早く、観光客に人気の高いライオンやチーターのような動物を捜し求めることを常とする。そこは開けた草原であるために、観光客がそれらを見れる可能性は高く、運がよければ狩猟場面に出くわすこともある。近年では、観光客が動物にあまりにも近くに接近するということが、動物への悪影響を心配する声も聞かれる。

しかし、このようなサファリには、あまり地元住民が関与していないのが特徴である(本書の10.6節を参照)。マサイマラの場合は、かつてウシとともに暮らしてきたマサイ族の土地であった。彼らにとってそこは、川辺林などを除くと大部分は草原になっている見晴らしのよい放牧地である。この場所の歴史をみると、20世紀に英国植民地政府によってこの場所は勝手に動物保護区として指定された経緯がある。そのときには、保護区内でのマサイのウシの放牧が完全に禁止されたわけではないが、現在、動物保護思想がさらに強く普及したことで、保護区内でのマサイの活動はまったく禁止されている。ちなみに、マサイの人々と観光客との関係といえば、マサイが自分たちの村において暮らしの一端を紹介するか、マサイ女性がつくったビーズ製品やヒョウタン製の水筒などを販売する程度である。

このように、アフリカ観光の主役であるサファリ観光の場合を見てみると、それには、旅行会社やロッジの経営者や従業員、そしてガイドなどから構成されており、マサイのような地元住民が参与することはあまり多くなかったことがわかる。

c. 「砂漠の美術館」での住民参与の形

しかし近年、アフリカの観光地やミュージアムの様相も異なってきている。地域住民の参加によって、その地域で受け継がれてきた自然や文化などを、保存、展示、活用していくエコミュージアムの基本的な考え方が浸透しているようにみえる。つまり、地域の自然や文化を現地でもるごと保存しているのである。

この意味では、アフリカにもエコミュージアム

が存在するといつてよいであろう。ここでは、筆者が数度となく訪問してきたボツワナの事例を紹介しよう。ボツワナは、アフリカの南部の内陸国であり、南アフリカの北側に位置する国である。この国の面積は日本の1.5倍あるのにもかかわらず、その人口は約200万人程度しかない。これには、国土の大半が水を得ることの難しいカラハリ砂漠で覆われていることが関与している。

さて、この国の北西部にソディロヒルズという場所がある。ここには、先史時代に書かれたとされる岩絵(ロックアート)が数千カ所で見られ、世界的にみても岩絵の密度が最も高い地域になっている。2002年には、この貴重な文化遺産がユネスコの世界遺産として指定されている。現時点では、まだまだ十分な研究が進んでいないが、これらの岩絵の書き手は現在、ほぼ同じ地域に暮らすサン(ブッシュマン)の先祖であり、過去の絵ではあるが現在ここで生きている人々ともつながりをもっているといわれる(本書の10.4節を参照)。

まず、観光客がこの場所に着くと、岩絵を案内するガイドがやってくる。彼らは、岩絵に近接する村の人々である。狩猟や採集で生活をしてきたサンの人々もいるが、ハンブクシュという農耕民の人も多く含まれている。彼らは、およそ1時間近くかけて点在する岩絵の見られる場所を紹介していく。なかには、岩山に登らなくてはならない所もある。ライオンやキリンのほか、海から遠いのにクジラやペンギンの絵も見られる。なかには、「宇宙人」といわれる絵もある。彼らは、岩絵に描かれる動物を見ながら、自らの文化と関連させることで説明している。まさにこの場所は、地域住民が参与して岩絵という文化をまるごと保存している「砂漠の美術館」といってよいであろう。

その一方で、近年、政府によってこの場所に建設された箱物のミュージアムもまた、従来とは異なるコンセプトでつくられていて興味深い。ここでは、ソディロヒルズにかかわってきた多様な人びとの歴史を展示しているのである。それは、研究者による数多くの岩絵や遺跡の発見であり、この地域に対する住民ひとりひとりの声であるのだ

が、それらがパネルにして展示されている。

確かに、ソデイロヒルズの地域住民が、エコミュージアムの考え方を本当に理解しているのかは疑問である。しかし、住民が参与する形をとり、地域の歴史と密接にかかわる「砂漠の美術館」は、まさにミュージアムから拡がり地域の活力につながっているように見える。現在、地域住民は、自らの財産や婚資としても使われるウシを飼育しており、そのウシがフェンスのまったくない「砂漠の美術館」にやってきては、観光客に遭遇してトラブルを起こすことに困っている。今後ますます、地域住民に加えて、政府やNGO関係者なども一堂に集まり、地域住民のニーズを考慮して、地域主体のミュージアムのあり方を論議していく必要がある。

d. エコミュージアムと地域の力

現在の日本では、エコミュージアムのブームが生じているかのようにも見える。地域全体を博物館にみなして、各地の地域づくりに盛んに適用されている。筆者は、これらの形が、従来の町並み保存による地域の活性化計画であるとか、行政主導で行われる観光地の開発の仕方などと、どのように異なった成果をもたらしたのかはよくわからない。しかし、エコミュージアムという言葉があまり慣れ親しまれていないアフリカにも、たとえ地域住民がそれを意識しなくてもその形を見出すことができるのである。現在、マサイランドにおいても、彼らが自らの土地での権利を獲得しようとする動きも高まり、動物観光に取り組むマサイも見えはじめています。

現代のアフリカを見わたしてみると、場所によっては、先進国の博物館に収蔵されているものが現実の生きた世界の中に存在していることがある。このため、地域住民が主役となって地域の生活を「保存」していくという意識は芽生えにくいであろう。しかし、それが観光資源として価値を持ち、地域住民の経済生活をうるおしてくれるものであると気がつくとするならば、住民は本気で参与してくるにちがいない。

最後に、大阪の千里万博公園にある国立民族学

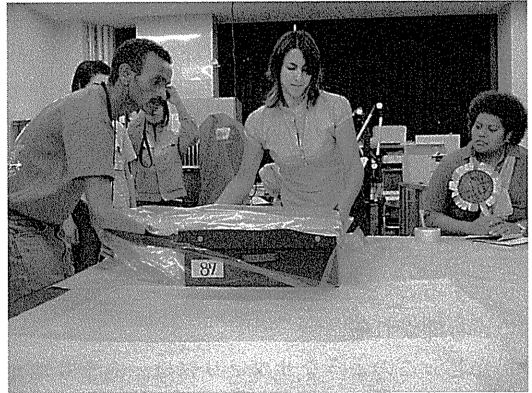


図 A.4 民博での研修風景（民博撮影）

博物館（略称、民博）は、2007年、開館30周年をむかえているが、あいかわらず箱物に大きく依存しており、世界の多様な文化の形を地域別に展示している。現在でも、大阪の千里という地域に深くかかわる博物館という視点はあまり強くないように見える。しかし、その民博は、途上国の博物館員を招いてJICAによる博物館研修を3ヵ月近くも行う場所ともなっている（図A.4）。これは、もう十数年も続いており、すでに百数十人が経験を積んでいる。このなかには、もちろんアフリカからの人々も含まれていて、アフリカ各地の箱物の博物館で活躍されている人が多い。今後、先進国の博物館事情に詳しいこれらの人々が、アフリカのそれぞれの地域においてミュージアムを中心にすえた地域活性化の計画を実現する際には、中心的な役割を果たすであろう。アフリカにおけるエコミュージアムの考え方が、はたして地域を再生するための力になるのか否か、今後の動向に注目していきたい。（池谷和信）

▶ 文 献

池谷和信（2005）：南アフリカ 21世紀の新たなフロンティアー、山下清海（編）華人社会がわかる本—中国から世界へ広がるネットワークの歴史、社会、文化—、明石書店。

三島禎子（2002）：ソニンケにとってのディアスポラ—アジアへの移動と経済活動の実態—、国立民族学博物館研究報告、27(1)、121-157。